

小田たつえ

——明日、どっか行かない？

あの人は寝るのが遅いはずだから、夜中二時半にメッセーヂを送ってきてもおかしくはなかった。外の暗さが窓を通して差し込むのに少しだけ抵抗するみたいに、自室は常夜灯が薄ぼんやりとしている。明るすぎるとあとで寝られなくなるから、これ位でいい。

——こんな夜中にどうしたよやっぱり。彼は起きていたらしい。

——寝れない

——え、珍しいな。大丈夫？

——いつもは日付すぎる前に寝てるんだよね？

——私だって人間なんだから、寝れない時ぐらいいあるよ夜型人間を豪語している彼。

——洋平こそ相変わらず夜型だからってゲームしてるんでしょ

——さすがに何時間も課題で起き続けるのはつらいなるほどね。遅くまでお疲れさま

——あんがと

課題を終わらせたらしい彼。

——で

——なに？

——明日だっけ

直前に自分で言ったことをすっかり忘れていた私。

——あーそうそう

——何時にどこ？

——明日空いてるん？

——むしろ何か予定欲しかった

——うーん

——ごめん、場所考えてなかった(笑)

——言いだしっぺなのにまじかよ(笑)

無計画な私。本当に、どこ行くのかな。

——じゃあさ、ゲーセン行かん？

——いいけど、何するん

——プリ撮らん？

——まじで言ってる？

——絶対写り悪いよ、俺

——最近じゃ機械も良くなったから

——いやそれでも俺の心きついって

——一緒に撮るだけでもいいから行こう？

——ちよっとだけ間があった。

——まあ撮るだけならいっか

——決まりでいい？

——うん。じゃあ集合どうする？

——んー

——いつもの駅で十一時

——おっけー

——少しだけ、眠気が来たような気がした。

——充電器に挿そうとしたとき、メッセーヂが来た。

——ちよっとだけ、どうでもいい話していいかな

——いいけど。なんかあった？

——昨日の日本史の授業でさ

——隣の稲荷社の取り壊しがあるって

——すごく先生が悲しんでたんだよ

——うん

——その先生が言ってる稲荷社ってさ

——悠稀の居る町のものらしいんだよね

——うん

——なんか知ってる？

——個人的に気になって

——稲荷社かあ

——多分うちから二キロ位南にあるやつかな

——でも取り壊し反対みたいな話は聞かなかったなあ

——そもそもそこら辺もう住んでる人自体少ないから

——そうなんだ

——多分その先生、民俗学を大学でやっていたから

——まあ確かにそういう学歴の人なら言うかもね

——地域信仰を卒論で扱ったらしくて、尚更だよな

——なるほどね

——まあ時の流れで忘れられるものが大半だと思うよ

返信はしたが、眠気がいよいよ頭を包み込んできた。

——だからね

——うん

——何も告げずに去ることだって、仕方ない時があると

思う

——そっか

——なんか、寝る前に長話になっちゃってごめん

——いいよ

——気にしないで

——洋平も、もう寝る？

——今日はさすがに疲れた

——このまま寝るわ

——だよな。じゃあ明日宜しく

——「おやすみ」

スマホの画面を切った。

明日。

翌朝十時半。

——どっちの出口行けばいい？

——そこ聞きそびれてたわ

——盲点だった。

——ごめん！

——南口のチューリップ花壇の前

——わかった！

私が着いた時に、彼は息が切れ切れだった。

「だ、大丈夫？」

「いや……もう……悠稀の方が先に居るかと思って……」

「ごめんね伝え忘れちゃって……」

「いいよいいよ。聞かなかった俺も悪かったんだし」

優しい。昔からずっとこうだ。

なにかにつけて謝る。基本的に二人であった時に何か

が有るたびにごめんごめん。明らかに私のせいのはずな

のに俺の不意だったって言ったこともある。ここまで

来ると謝らないと気が済まない一種の癖みたいにも思え

た。でも別にそれが気に食わないわけじゃなかったし、

本当に優しいからなのかなって思っている。

「どうする。昨日言った通り、ゲーセン向かうか」

「うん。けどね、ここら辺の機械は古いからさ、電車で

移動したいんだけど、いいかな？」

「そっか。いいよ。じゃあ行こっか」

「うん。あ、Suicaのチャージとか大丈夫？」

「ここに来る前にしておいた」

電車はがら空きだった。日曜日の昼前なのに。でもよ

くよく考えたら、連休が終わってすぐだったから、出か

ける気力もお金もない人の方が大多数だったのかもしれない。

連休中、洋平とは一度も会わなかった。彼は、通

っている進学校の中でも優秀な生徒で、連休中も、

——ごめん、学校行かないといけないんだ

と言うほどだった。

かと言って私の事を蔑ろにしているわけじゃなくて、

——代わりにさ、夏休みは遠くへ行こう

——一緒に行きたいところがあるんだ

とも言っていた。やっぱりいつでも優しい彼。

でもごめんね。もう、それはできないんだ。

彼は私と電車に乗ると、隣の席に座って、体をすり寄

せてくる。

「……眠い……」

そういう彼を、私はいつも受け入れてあげる。寄りかか

った彼を、少しだけ撫でてあげる。

「昨日夜遅くまで頑張ったんだよね。お疲れ」

「……うん、ありがとう」

肩に重みがかかる。すぐに、すう、すう、と彼の穏やか

な寝息が聞こえてきた。よほど疲れていたらしい。

「これからも、無理しないでね」

僅かに伝わってくる彼の心拍が、少し落ち着いてきたの

が分かった。彼の膝元に、そっと片手を委ねた。緊張が、

すうっと解けていく。地下鉄に響くはずの轟音は、私達

の周りには届かなくなっていった。

「間もなく、——です。お出口は、左側です」

あつという間に、目的の駅が近づいてきた。

「ほら、もうすぐ着くから起きて」

起きない。重みが増す。

「ほら」

肩をたたく。彼がむくつと軀を起こす。

「あごめん、めっちゃ寄り掛かっていたよな」

「ああ……」

——もう着いた？

ずり落ちた眼鏡を上げる。

ぐつとブレーキが掛かった。少し洋平の方に躰が押しやられた。

「ごめんね」

「いいよ」

「降りよ」

「うん……」

彼は、寝ぼけた感じがまだ抜けていなかった。

長めのエスカレーターで地上に上がる。反対側のレーンに乗っている人はいない。本日に今日は、静かな日曜日だと思う。いつもなら、こちら辺のお店に行きたい。同じ年くらいの子達が行くなり帰るなりしている。連休の持つ、人の気力に対する吸引力と言うものは凄まじいのだ。

「静かだな」

「うん……」

「それだったら、買い物とかするか」

「いいの？」

「時間あるし。人でごみごみしてないならいいよ」

「じゃあさ、ひとつ買いたいものがあるんだけど、いいかな」

「おっけー。じゃあ買いに行こう」

駅近のショッピングモール二階にあるアクセサリー店に入った。私個人できたことがあったけどもう結構昔のことだった。確か首元が寂しいからって、ネックレスを買ったと思う。しばらく使っていたけど、半年ぐらい前に留め具が変形して付けられなくなって、今では化粧台かどこかに置き放している。

「いらっしやいませー」

日曜出勤の気だるさが、声ににじみ出ていた。

アウトレット品を扱っているから、思っていたよりいいものが陳列してあった。洋平は無論こういうのに疎いから、眠たげな眼でちらちらと商品を覗きながら、店内をうろついていた。

迷いに迷っていた。仕方ないから、店員を呼んで相談した方が良さそうだった。話すのが本当に苦手なものだから、人に声をかけるのは、おっかなびつくりになっちゃった。

「す、すみません……」

「はい！何かお探ですか？」

「あの、その、ペアリング、ってありませんか……？」

「はい、ございますよ！ご案内します！」

大きい。一々返答が大きい。異性の連れがいるのは入ったところを見ていれば分かるはずだから、察して少しは抑えてほしい。

レジ脇の大きい棚の方に連行された。

「こちらになります！」

「あ、どうも……ありがとうございます」

「ゆつくりご覧ください！また何かございましたら、お気軽にどうぞ！」

鼓膜がひりひりした。それを少し落ち着けてから、棚を見下ろした。しっかりとしたペアリングだ。シンプルなものから豪華絢爛なものまで、幅広くあった。お金については問題ない。前々から貯めていた貯金を切り崩しておいた。シンプルなら付けやすいかな。でも、あげる物だから少しは装飾があってもいいかな。でも身につけてこそそのリングだから……

結局、何十分もその場に固まって、頭の中で考えこんだ結果、三番目にシンプルなものを選んだ。さっきの元気な店員さんと呼んで購入を伝えたら、

「ありがとうございます！」

とまた鼓膜を痺れさせてきた。

「ありがとうございます！またのお越しをお待ちしております！」

さすがに少し距離を置いていたから鼓膜は問題なかった。

「買ったんだ。何にしたの？」

青フェルトの外箱をひとつ袋の中でつかむ。誰もいないから、その場で立ち止まって彼に向かい合った。

「……これ」

人の目を見て話したり何かするのはいつになっても難しくくてたまらない。どうしても、俯き気になってしまう。

「俺に？」

箱を受け取る彼。

「指輪？」

「あの、これね、私とペアなの！」

箱からがぼつ、ともうひとつを取り出した。

「これって。ペアリングってやつ？」

「うん……せつかくだから、付けておいてほしい。私も付けるから」

「いいよ」

お互い、人差し指に通した。

「二人だけのものって、いままでもなかったもんな」

「そうだったね。出かけたとかしたことはあったけど、こういう風に、物では初めてかもね」

「こういうのも、アリだな」

「よかった。気に入ってくれたみたいで」

頷く彼。

「じゃあ、プリ取りに行こ」

「あ、うん、分かった……」

顔が少し赤らんだ。リングに気を取られていて忘れていたのかと思った。

彼は、写真の前では本当に照れくさげになる。いつもの真面目ぼさが消える。

「洋平、緊張しすぎ」

小銭を投入しながら私が言う。

「や、やっぱ自分の姿撮られるのは、に、苦手で」

「私が隣に居るんだから、大丈夫」

「いやでも……」

「ほら、撮影始まるよ」

十回位の撮影のうち、彼が俯かずに撮れたのは二枚位しかなかった。でも、これだけでも十分だった。

「あとはこちらに任せて。その机のところまで待っててはたから見ても、彼の顔がものすごく紅潮していた。」

「か、顔冷やしてくる」

「いってらっしゃい。終わったらこちら辺に来てね」

加工はあんまり好きじゃないから、大して時間を割く必要もなかった。印刷時間のほうが長かったくらいだ。

「おまたせ」

「お帰り。はいこれ」

切り取った彼の分を渡す。

「い、いらないよ、自分が映ってる写真なんて」

「私と一緒にだからいいでしょ？」

「う、うん……ありがとう……」

これで思い残すことも無いかな。一緒にいられた証拠もいまこうやって二つも手に入れられた。

「悠稀、喉渴かないか？　なんか飲もう？」

「ん？」

一緒に珈琲を飲んで今日は終わり、か。いいかも。

「いいよ。わかった」

地下一階の珈琲店に入った。

「御注文を」

「コーヒー、モカマタリ」

「あ、私、アイスココアで」

「かしこまりました」

珈琲が好きなのは、こういう珈琲店に行く度「もかまたり」という呪文を唱える。

「ここは初めてだな」

「洋平はここちら辺に来るのも初めてじゃなかったっけ」

「いや。映画館が近いからあの駅で降りることはよくあるんだ」

「映画館なんてあったっけ？」

「あるよ。北口出て五分位のところに。小さいから知らないのかもな」

「うん。洋平は、どういふの観るの？」

「昔の洋画だよ。『風と共に去りぬ』とか」

「名前だけは聞いたことある」

「昔の洋画っていうのは、ある種の美しさがあると思うんだ。僕はそういうのが好きで」

「さすがインテリ」

「冷やかさないでくれよ」

「冗談冗談」

「まあ知ってるけどさ。悠稀も今度一緒にどうかな」

「いいね。おすすめの本が上映される時に教えて」

「そうだ、再来週から『アーティスト』ってのがあるんだけどそれが観たいな。二〇一二年のやつんだけど」

「え、最近の作品なのに観たいの？」

「実は、この作品ちよつと一風変わっててね。サイレント映画なんだよ」

「ってことは、台詞がないってこと？」

「そうそう」

洋平の後方から、ウェイターが銀色の盆を片手に載せて近づいていた。

「お話し中失礼します。ご注文の品を」

カップとソーサーが彼の方に、ストローのささったグラスが私の前に差し出された。

「モカマタリのお客様、ミルクとシュガーは」

「いや、結構です」

「かしこまりました。ごゆっくり」

領収書を置いて、ウェイターが去った。

「飲もうか」

「そうだな。それに、危うく映画のネタバレをしちゃうところだった」

「美味いね」

「ああ。こつちも独特の酸味がいい塩梅で美味しいよ」

結局、一杯の珈琲とココアで一時間喋り続けてしまった。会計は、

「僕が言い出したんだ」

と言って、金額彼が払ってくれた。

「ごちそうさま」

「ううん。良い店だった」

「そうだな」

夕方。五月末で、陽は長くなった。だが、それも今や消えかけている。

「俺、明日もあるからそろそろ」

「うん、私も」

「今度は映画かな」

「そう、だね」

「こういうことできるのは、やっぱり嬉しいな」

「プリも案外楽しかったでしょ？」

「いやあれは……うん。楽しかったです」

「うん。よかった」

「あと。これありがとう」

右手を差し出した。

「うん。大切にしてね？」

「もちろん」

お互い、帰る方面は逆。私が山方面で、彼は海側。

「また連絡してくれよ」

「またあとでね」

「じゃ」

駅の照明に照らされ、青いシャツが、遠のいていった。

「ごめんね洋平。私は――」。

あいつとの連絡が取れなくなって二ヶ月が経った。

僕とあの駅で別れたあと、一切連絡が取れなくなった。

連絡先も、利用できなくなっていた。無論、少しして警

察にこの事を伝えた。親身になってくれた警官に知って

いる限りの彼女の情報を伝えた。最後に会った日の服装

彼女の住所や、特徴。知っている限りの総てを伝えた。

だけだ、

「失踪した時間の前後に、彼女が通ったはずの場所のカ

メラを調べただけだね

「はい」

「其れらしい人はやっぱり映ってない」

と報告を受けた。先週のことだった。

「人は通ってるんだけど、特徴に合った服装や特徴には合わなかったよ。あとは、ハクビシンとかの野良の動物とかだけだね。そうそう、キツネもいたっけな」

「はあ……」

「あ、でもね」

警官は、チャック付きのポリ袋を見せてきた。

「その次の日にね、これ見つかったんだけど」

指輪だった。自分の人差し指を見る。同じ形だった。

「もしかして」

「……はい」

「僕が言うのはあれだけど」

「はい？」

「その子、そういう子だったんじゃないかな」

「……違うと思います」

「え？」

「……彼女のせいじゃないですよ」

単純すぎた、僕のせいだ。

そう、僕のせいだ。抑々、こんながり勉みたい人間に寄り添ってくれる女性なんて、いるはずがないと思って

いた。いつの間にか彼女と知り合い、連絡先を交換して、

流れで付き合い始めていた。それも彼女の計画だったの

かもしれない。でも、それでも、あの時間が僕にとって

楽しかったのは紛れもない事実だった。

家に帰る。自室に駆けこむ。目の奥が熱くなる。体の

緊張が抜けきって、ヒョロヒョロの骨と皮になり下がっ

たように感じた。小一時間、何もできなかった。

……彼女に、手紙を書きつづった。文書作成用につ

も使っている万年筆で。何度も書き直してしまった。

「悠稀へ」

他の星に迷ってしまったのでしょうか。此方は鈴虫が

なっています。あの日以降、モカマタリは飲めていま

せん。映画も、観ていません」

ですが、私は貴方を忘れずに、私は生きていきます」

一個だけのペアリングを同封して、窓際に置いた。

外は、陽光が射しこんでいるというのに、雨粒が降り注

いでいた。